

第四十回 宮島全国短歌大会

大松 達知 先生 選

入賞作品

特別賞

広島県知事賞

差さるるを待つ暗き穴がいづくにかあらん何かの鍵ひとつ出づ

(二九三) 広島 木下陽子

(評) 日常の中のふとした発見から始まる発想がいい。人と人、人と物、物と物、の関係がうすらいでゆく感じのする現在。遠い記憶を持ちながら、雌伏しているような鍵。それは過去のつながりを大切に思うきつかけであり、未来の新たな出会いを切望する気持ちであるかもしれない。想像を一步先に進めることのおもしろさ、短歌による咬きが深い内容を持ちうることの証明であるようだ。

日本歌人クラブ賞

お湯に入るまんまる乳房の娘らの向かいに堂々わたくしの乳

(七) 大阪 坊 真由美

(評) 温泉のような広い浴槽だろう。若くてハリのある体を肯定しつつも、それなりの歴史をくぐってきた自分の今を肯定する読み方がいい。「まんまる」対「堂々」の音のひびき合いが一首に勢いを与えているし、「乳房」と「乳」の使い分けも絶妙だ。「わたくしの」とあらたまつたような読みぶりもユーモラスでいい。

広島県歌人協会賞

「ただいま」と二階より下りてくる夫よ私の知らぬ時から帰る

(三一三) 広島 新井 邦子

(評) 同じ屋内にいたはずなのに、外出から帰ったときの挨拶をする夫。現実的には、言い間違えなのだろうけれど、その顔つきにおぼろげな様子があつたのかもしれない。まるで宇宙空間や過去や未来に行つて帰つてきたような、不思議な感覚があつたのかもしれない。「私の知らぬ時」がミステリアスな印象を残す。SFの一場面のようなおもしろさがある歌だ。

山口県歌人協会賞

ズイズイと青き柿の実太りゆく傘寿来ている吾れへあかんべえ

(四三四) 広島 河崎 典子

(評) まずは「ズイズイ」の元気な感じがいい。ゲンゲンもドンドンでもない。迫ってくる感じ。そして、傘寿がまるで他人事のようにやってきたという把握も効いている。さらに最後の「吾へあかんべえ」の言いつ放しの感じが爽快。柿の実があかんべえをしていると読んだが、作者がご自身に向かってあかんべえをしているとも読める。どこか突き抜けた感じがいいのだ。

宮島全国短歌大会実行委員会賞

テーブルに三本入りの草だんご母の亡きいま一串のこる

(七六) 山口 余園 岡子

(評) あるものの「存在」によつて「不在」を明確に意識する構造が巧みだ。ときおり買ってくる三本セットのだんごだったのか。そのうちの二本は、二人が食べていた(だから不明だが)のだろう。三本とも無くなるのが、実は当たり前のことではないと知つて驚いたのかもしれない。母がだんごを食べていた姿をありありと思ひ出しているようだ。こういう挽歌もあるのだ。

広島県教育委員会賞

穏やかな水面の先にパラナ松そうか我いまブラジルに住む

(三七九) ブラジル 腰越 久雄

(評) ブラジルのどこかに移民されたと読んだ。(一時的ではなくて。)ぼんやりと水面を見つめていると、現地に特有の樹木が見えたという。エキゾチックな名前がいい。(松の仲間ではないようだ。)そこでふとわれに返つて、日本からは遠いブラジルにいるのだと、認識を新たにしたのである。水面は普遍性があるけれど、その周囲の植生は土地によつてそれぞれ違う。その感覚もおもしろい。

甘日市市長賞

オリオンに行つて来ますと声かけて夜明けの海漕ぐ舟のごと出づ

(四七〇) 広島 三澤明美

(評) オリオンは、スーパの名前だろうか、行きつけの食堂か飲み屋さんか。何かのお店だろうと思つた。とにかく星座であれば「オリオン座」というはずだ。言われた側も知っている日常の場所だろう。だれが「声をかけて」なのかにも、自分か相手か、ふた通りの解釈がある。気軽に告げて出てゆくのだか、そのいそいそとしたそそくさとした感じに大げさな比喻を使っているのがおもしろいのだ。

甘日市市教育委員会賞

米寿と卒寿の間あいたにあつて何でもない齡よわいにふらつと生きております

(五二二) 広島 徳田義幸

(評) 八十八歳と九十歳はかなり近接してお祝いがある。が、その間の一年のほうに注目したのがいい。「なにもない」とは言っているけれど、それぞれが大切な一年であることはみな理解しているわけだ。それを「ふらつと生きております」と笑わせにかかつたところもいい。もし「がんばって生きています」だったら興奮め。なにげなさをまとうのが短歌としては上等なのだ。

厳島神社賞

また僕を置いてひとりで眠る君 カレーの上のラッキョウみたいだ

(五七二) 愛媛 川又郁人

(評) 上の句、下の句のそれぞれの意味はわかるのだけれど、その連携に謎を含ませる。ただ、比喻は分かりすぎではダメで、少々強引なほうが詩としてはおもしろい。さて、カレーの「上」も謎。ふつうはカレーの「脇」「横」あるいは「皿」ではないか？ それもお米側につけるのではないか、とも考えたりする。ただ、不思議な寂しさや孤独感が湧き出ているようにも思えた。

宮島観光協会賞

ピオーネの弾力に歯を当てるとき地球の網膜はじける予感

(四八) 広島 山田典彦

(評) 黒葡萄のピオーネ(先駆者の意味)から、球体としての地球を想ったところが独特。網膜は眼球をぐるっと覆っている透明な膜。とすると、巨人としての作者の歯が地球をほんの少しかじると、海や陸地が弾け飛んでしまふ、というシーンかもしれない。壮大な想像がいい。短歌はときにこんなとんでもない発想さえ、リアルに幻出させることができるのだ。

中国新聞社賞

吾もまたやがては死ぬと思ふ夜赤い苺をやさしく洗ふ

(八四) 山口 濱 田 道 子

(評)

上の句と下の句はどういう関係なのか。両者は無関係なのか、死を思ったので、苺に触れたのか、苺に触れていて死を思ったのか。おそろくどれも正解。読者にそのふたつをそつと提示するだけであとは任せているのだ。そこに、苺が心臓の形に似ていると言われることや、鮮血などとの関係を思い浮かべてもいい。そして結局は、作者のいたこのひとつの場面をそのまま受け取ることになる。

NHK広島放送局賞

筆立てに母の遺せし木の編み棒ときどき背を搔かせてもらふ

(二四七) 山口 光 井 加代子

(評)

これに近いことは他の人にも実際にあるだろう。ただ、下の句のリズム感がユーモラスであるので、読者は湿っぽくならないのがいいのだ。本来の編み棒の目的とはずれているし、ひとり背中を搔いているのも滑稽なシーン。そう笑わせておいて、母親との繋がりがや思い出を考えさせるのが巧み。笑ったあとしんみりさせるのは短歌の得意技なのだ。

中国放送賞

一度だけわが自転車で校庭を一周したる君の反乱

(二九六) 広島 富 田 清 人

(評)

どういう人間関係なのか、わからない。だが、わかっても、読者それぞれの想像の方が「良い」可能性もある。「わが」自転車とあるから、かつてに借りて乗ったのか。それが「反乱」と呼ぶほどの事件だったのか。青春映画の一シーンを想像した。恋人の女性が、なにかのきっかけで男性の作者の自転車に乗って、走ってはいけないはずの校庭を走った。そんな青臭い思い出のシーンだといいなあ。

広島テレビ賞

ゆくりなく出会ひし坂の雨蛙さよならとぼとぼ下りてゆきます

(三三九) 千葉 藤 野 宏 子

(評)

通例、平凡なオノマトペを入れると歌は俗っぽくなる。「てくてく歩く」「雨がしとしと降る」の類。だが、ここではそんな「とぼとぼ」が自己の姿の客観的な把握として、意図的に使われていることがわかる。そこに寂しげな表情のある「雨蛙」が置かれている。おまえも俺も生きてゆくのは大変なんだよな、なんて会話が聞こえてくるようだ。

広島ホームテレビ賞

老いたれどいまだこの身は豊かなりまだ逆立ちの出来る錯覚

(四六六) 福岡 西城 燁子

(評)

老いを嘆く歌は多いようだ。そのお気持ちはわかる。ただ、それでは当たり前だし、他の作者と同じになってしまう。だから、少々がんばっていただき、逆方向に詠んだ方がユニークな歌になる。この歌、「逆立ちをする」では自慢で終わってしまう。そこを「出来る錯覚」と、ユーモラスに自分を描くのがいい。それこそが「豊かなり」の余裕と軽やかさなのだと思った。

テレビ新広島賞

寂しいと「寂しくない。」と君は言うそういうときの固いくちびる

(三二二) 埼玉 加藤 健司

(評)

どんな状況なのだろうか。相手の気持ちがお見通しなのだ。わかりあっている二人なのだ。意地を張っているわけでもなさそうだし、もしかしたら、相手にわかられていることを前提に「寂しくない。」と言っているのかもしれない。ただそこに、「固いくちびる」が事実として存在することがすべてを物語っているようでもある。10代の若者同士の歌とも、長年連れ添った夫婦の歌とも読めた。愛の歌なんだな。

優秀賞

ほいじゃけえやつぱうちらは仲間なんよぶちいたしいけど仲良うせなよ

(九八) 福岡 中村 仁彦

孫もたぬ吾が立ち寄る絵本棚ちっちゃな椅子に「かばさん」を読む

(二一九) 山口 倉谷 節子

ブロー力野、ウエルニツケ野とふ野は荒れて愛の言葉を創り出せない

(二九二) 山口 宮田 則子

義歯なれば藁を噛むかの感じせり藁を食ひたることはなくとも

(二〇九) 広島 小坂 修

前ばかり青空ばかり見てたからクスノキの実をかなり踏んでた

(三二五) 山口 宮崎 稔子

今し方落ち葉になつたもみじ葉を踏まずに歩く面会の帰路

(二六一) 広島 上田 千津子

キキキキケケツキョケケキツキョうぐいすのむせびなくなり三十五度の日

(二七二) 広島 高本 寿子

バズるなる言葉無理して使いおりたどたどしいと紫陽花わらう

(三三二) 広島 古谷 明子

皆みなといふ古字を見つけし夜に思ふこぼれしままのわれの時間を

(三六〇) 広島 縄 田 妙子

モナカ状ぱりんとしてるアイスだよ頼まれて探すぱりんぱりと

(四三九) 山口 武 重 周子

ポリ桶に鍬を沈めて洗いおり雨に満杯となりしポリ桶

(五〇二) 山口 松 藤 静 枝

舗装路をぐるるるるる持ちあげる切実なのだ楠の樹根は

(五一八) 広島 森 本 直 美

なぎ渡る歳月さむく思ふなりをんなは深く入り江をもてば

(五八〇) 茨城 松 田 早 苗

八十四年生きてしまいぬこの顔が鏡にのぞくうれしくなりぬ

(五八四) 広島 高 亀 美 子

夏だったしたたかだった雨だったふざけ合ってたただ光ってた

(六三四) 滋賀 福 永 昭 子